

特集

財政学研究会冬シンポジウム

「陸前高田市の状況報告～復興の現場から～」

久保田 崇（岩手県陸前高田市 副市長）

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました久保田でございます。いま、ご紹介が植田先生の方からありましたとおり、私は京都大学の出身で、総合人間学部に1995年に入学しております。

ちょうど阪神・淡路大震災が起こった年で、私は静岡の生まれなのですが、ちょうどセンター試験の2日後ぐらいが阪神・淡路大震災でしたよね。その次の4月から入学して、やはりクラスメートの中には被災した方が、神戸の辺りから通っておられる方もいましたので、そういう意味で、それからもう何年か、17年たっておりますけれども、いまは岩手県の陸前高田市で復興の仕事をしております。

その前は内閣府という国の役所に勤めて10年以上法律をつくったりしていました。ですから、ちょうど震災が起こったときは東京、内閣府にいたわけなのですが、その後、震災の年の8月に陸前高田の方にまいりました。

ちなみに岩手に行く前までは、内閣府の村木厚子さんという、いま厚生労働省の事務次官で、無罪判決が出た方なのですが、村木さんがまだ内閣府の統括官をされていて、村木さんの下で働いていたことがございます。

陸前高田の方に私は縁がなかったのですが、震災後に、ちょっとしたボランティアのような縁で訪問したのをきっかけに、陸前高田の市長の戸羽太という、ひげのというか、いまはひげをそっちゃっていますけれども、いろいろと発言をされていて、奥さんは津波に流されている方ですけども、その方に引っ張られて陸前高田に赴任して、2年と4カ月ぐらいになります。

皆さん方の資料を拝見すると、ちょっと今日は非常に難しい議論もされるような研究会だなと思ったのですが、私の方からは、簡単に現地の実情をまずお伝えした上で、では、陸前高田市に対して復興予算がどういうふうに来ていて、実際に植田先生の給料を使わせて頂いているわけですが、そういうことから、有効に使われているのかどうかということ、あくまで私の知る範囲でございまして、お話をさせていただきたいと思っております。

まず資料の方は、パワーポイントの6枚が1ページになったものと、その後ろの「復興交付金について」という、これは復興庁の資料ですが、その二つがございまして、取りあえず、その資料の前に、現地の写真を持ってきましたので、そちらの方をお見せしたいと思います。

いまここに映されているのが陸前高田市の、ちょうど津波が押し寄せたときの瞬間を切り取った写真でございます。陸前高田市は岩手県の最南端、すぐ南は宮城県の気仙沼市ですから県

境の町でございます。

この写真の奥側、上側は太平洋につながる広田湾。広田湾は、この右手の所に、いわゆる松原、高田松原といわれる7万本の松が、まだこの写真の段階では残っていて、おそらく、この10分後、20分後には、1本を残して全てなくなるのですけれども。

この真ん中のところが、かなり波になっていますけども、気仙川といわれる川でして、本来であれば海に向けて左から右に流れている川です。ところが、この津波の瞬間は津波が遡上してきたということで、右から左に逆流して、写真に写っていますけれども、そのときに家とか、そういうものが簡単に流されていった、そのときの瞬間です。時刻にして3月11日の3時10分とか、15分ぐらいではないか。揺れがあってから30分後ぐらいかと思います。

この写真は震災の翌日の朝の写真です。この写真の時点では、かなり水は引いている、ピークではないということなのですが、このとおり本当に、例えば、ここに残っている、左側というか真ん中の建物はキャピタルホテル1000。千昌夫さんが陸前高田市の出身者でございまして、当時は千さんが建てたというか、オーナーでいらっしゃったのですが、震災の結構前に千さんは手放して、市のものになっていたのですが、名前はキャピタルホテル1000という。

キャピタルホテルは、また別の場所に最近再建されて、千の名前が残っているのですけども、そのホテルも概観はこういうふうに残っているんですが、中身はぶち抜かれておりますので、当然使える状態ではなくて、判定すれば全壊という状態ですね。

これが私どもの、本来であれば職場である市役所でございます。この市役所も海から1・5キロは離れておりましたけれども、この建物の4階まで津波が来まして、市長、ほか4階の屋上で一晩を過ごして難を逃れた職員や市民も100人以上はいらっしゃいますけれども、逆に、その屋上まで上がれずに、この建物で命を落とした方も数多くいらっしゃいます。

震災遺構の話がありますが、この市役所については既に、もうずっと前、昨年の段階で解体撤去されております。今後の町づくりにも支障が出るということもありまして、この市役所は解体しましたが、陸前高田市では、ほかに一本松や、気仙中学校や、雇用促進住宅と、幾つかの建物については震災遺構として保存するとしております。

この写真は航空写真でして、震災前の陸前高田ですね。先ほどの冒頭の写真の気仙川というのは、この川でして、松原がこういうふうにあるということです。本当に海に近いところに町が出来上がっていて、田んぼも残っていますが、この辺がすごく密集している。先ほどの市役所はこれですね。という感じの町でございました。

震災後は、こういうふうに松原もすっかり消えて、密集していた家とか、そういうものも一切なくなってしまっているという状況です。ちなみに、いまの時点で、こういうふうに写真を撮ったとしても、この写真とそんなに変わっていないですね。

変わっているといえば、さっきのキャピタルホテルとか、市役所とか、残っていた外観上の大きな建物も解体撤去されて、逆に何もなくなっている。ところどころの地点に土を盛ってあるようなところができまして、盛り土というのですが、地盤のかさ上げの工事が少しずつ

進んでいるという感じです。

こちらが陸前高田駅。JR 大船度線というローカル線がありまして、陸前高田駅の前にある中心街ですね。中心街といっても震災前でも2万4千人の人口の所ですから、そんなに大きな繁華街というか、町中ではございません。この同じ地点が、震災後に、このようになっております。

いま、この地点を通ったときに、前の繁栄した街並みを思い出すのは非常に難しいということで、たまに古いカーナビを付けた方がいらっちゃって、陸前高田駅とか市役所とか、そういうものを入力して来られるのですが、何もない所に「陸前高田駅に着きました」と言って着くんですが、本当に何もないのにびっくりされて電話をかけてこられたりすることもあります。そんなふうな状態です。

これが海側から町の中心部を眺めた震災前のビフォーの写真です。そして同じ場所が、こちらということで、この一番奥にある大きな建物は高田高校という高校ですね。町で唯一の高校でして、校舎はこの辺が残っていますが、ただ、見るところ穴が空いていますので、ぶち抜かれて全壊状態です。この建物も解体撤去されています。

この高田高校に至るまでの、この辺にありました全ての家、2階建て以外の建物なんかは、もう基礎も残らずに、そのまま消滅してしまったという感じですので、何も残りません。

これは駅で、市内に陸前高田駅のほかに幾つかあった脇ノ沢駅という、単線ですから小さな駅ですけども、それもこういうふうには。

ちなみにJRについては、線路、および駅が流されて、東京から行くと東北新幹線の一ノ関という、仙台から三つ先の駅が最寄りの新幹線駅なのですが、それから本当はローカル線で東に気仙沼まで行って、そこから北に向かう大船渡線というのがありますが、いまは気仙沼までしか線路がなくて、そこから先、陸前高田を通して大船渡まで行くのが流されたままです。まだ復旧はしていません。

ですので、いまはJRさんが、BRT (bus rapid transit)、バス高速輸送何とか（システム）という、一部線路の区間のレールを引っぺがして、そこをバス専用道にして走らせているものがありますけれども、いまは、それでだいたい交通の足にしております。鉄道自体は、どうもJRさんは、本音のところ、あまり戻すつもりはないようでして、赤字路線ですので、なかなか戻してくれないといった格好ですね。

これは現在の写真です。1カ月前ぐらいだと思います。いま進行中の工事を表した一つの写真なのですが、こういう感じで幾つかの箇所です。工事が、がらがらと始まっております。いま市内を走る車両の半分以上がダンプカーですね。非常に多くて、でも、本当に始まったのは今年になってからですから、まだ被災地の現状としては復興が始まったばかりという感じなんです。

これは何をやっているかと言いますと、ちょっと奥の、気仙川を挟んで向こう側が宮城県方面ですね。ここの山が削られているんです。山肌が露出していて、削っているんですけども、

ここが高台の移転地。家をなくされた方が今後家を建てられる宅地の造成をやっております。

こういう箇所が市内に何カ所もあるので、何カ所というか、何十カ所もあるので、ここだけという意味ではないですけども、こういう感じで工事をやっております。これは後でパワーポイントの方でも説明しますが、復興交付金を使いまして、土地区画整理事業という事業の中でやっております。

国からお金を受けて陸前高田市が主体として事業を発注して、それを一回 UR さんに投げて、UR さんが、当市の場合は清水建設さんというスーパーゼネコンですね、清水建設さんのグループ、清水 JV と組んでいますので、清水 JV の方に作業をやってもらっていると。

陸前高田市では、高台の造成が非常にたくさん、何十カ所、2 千 200 世帯分は必要ですので、つくるのですが、そのための高台の土地の切り出しというのが非常に多いです。ですので、その土が川の対岸の向こうの山から大量に出てくるのですね。

それを、いまはダンプカーで運んでいるのですが、ダンプカーで運ぶのでは、とてもじゃないけど切りがなくて、ダンプカーで運ぶと、運ぶだけで 10 年以上かかるという計算になるようでございます。

ですので、その代わりに、川を渡らせないといけないのですが、ベルトコンベヤーを川に通して、直接コンベヤーに乗せてしまっ土を運んでくるためのベルトコンベヤー設置作業の橋梁を橋の両側につくって、その上に地上 40 メートルぐらいのベルコンを、があつと通す。

ベルトコンベヤーといっても、普通われわれが想像する 30 センチぐらいのカタカタと動くものではなくて、幅 6 メートルの普通の道路ぐらいですね。普通の道路は 3 メートル 3 メートルで 6 メートルですから、道路ぐらいのコンベヤーができて、それで土をどんどん運んでくるということです。

ですから実は、これは写っていないですけど、1 本松が、ちょうどこの辺、もうちょっと手前にあるんですよ。1 本松は、いまめちゃくちゃ訪問者が多いのですが、1 本松に来た人たちが「この橋は何だべ」と。「何だべ」というのは岩手の方なのですが、「何でしょうか」と、いろいろおっしゃいますね。

これは現況ですが、いわゆる仮設の商店街です。こういう格好で、皆さんはお店とか、事業所とか、かなり流されていますので、その代わりに、こういうプレハブのかたちで、おそらく従来よりも、もちろん狭いですがけれども。

これを経産省の傘下の中小企業整備基盤機構という独法がありますけれども、そちらに、無償の仮設店舗設置事業をやっていただいて、被災された事業所は無償で、ここに入居できるということです。この事業の活用は陸前高田市が東日本大震災の被災地の中で一番多いようでございますけれども、何百と、こういう格好のものがあります。

私もよく行っている所なんです、ここに鶴亀さんというすし屋さんがあって、ここに菅久さんというお菓子屋さんがあって、ここはホープさんという雑貨屋なんで、あまり行ったことはないんですけども。ここは家具屋ですね。あと、てるてるという居酒屋があったり。

外からだとちょっと見にくいのですが、そういういろいろな事業の方が営業されている。こういう仮設商店街も市内に7、8カ所はあります。もっとあるかもしれないですね。という格好です。

これは、いわゆる仮設住宅でございまして、こういうかたちの長屋タイプの所に皆さんお住まいで、陸前高田市では、いまいるのは人口2万人ぐらいで、仮設にお住まいの方が2千200世帯、5千500人ですから、3人から4人に一人は、いまもなお、こういう所に住んでいる。

彼らの最大の願いは、一日でも早く、この仮設から出て、高台の方に家を建てるか、あるいは公営住宅に入るか、基本的に二つに一つになるんですけれども、そういうことを望んでおられます。

ところが、先ほどの造成工事を見ても分かるように、これが、すぐ終わるようなものではないものですから、遅い方だと、あと5年かかるということなんです。ですから、5年後に土地の引き渡しを受けて、それから家を建てだすということですから、本当に家を建てて仮設から移れるのは、それこそ本当に、東京オリンピックが7年後にあります。それとどっちが早いかぐらいなスピードですね。

阪神・淡路大震災のときは、仮設に一番長く住んでいた方が5年ぐらい。2000年ぐらいに最後の撤去が終わったと聞いていますので、5年だったそうなんです。今回の東日本大震災では、当初のより、あと5年というのがありますので、阪神のときより、さらに長くなっているということでございます。

これは一本松ということで、こちらについては、1本だけ残っていますということで保存事業を進めて、いま非常に訪問者が多くなっております。この保存事業は、最近復興庁が一つの町に一つに限って震災遺構を保存するのを認めることを打ち出してきましたけど、私どもにとっては、これはかなり遅い決定でございまして、

当市の方では、この一本松、一本松が遺構かどうかというのは、また別の議論があるんですが、ただ、こういう残ったものを保存しようということ。ただ、これは、なかなか税金を突っ込むのは適切なものではないとわれわれは判断しまして、保存事業は市の方で決定はしたんですが、保存費用については、全て募金で賄いました。

これは相当大的な代物でして、1本松は27・5メートルの身長があるんですね。建物で言うと10階建てぐらいになるんですけども、非常に高いというか、大きいので、保存するときに本当に大変で、芯をくりぬいて、中の芯を入れ替えて、保存が利くように樹皮をコーティングしたり、いろいろとやって1億5千万円の所要額が掛かるということで、

私どもは募金を呼び掛けて、本当に集まるかどうかと思ったのですが、何とか1年ぐらいかけて、いま1億7千万円ぐらいは集まりまして、無事保存を完了することができました。

保存に協力してくれた人のうち、いろんな方に協力してもらったのですが、この間亡くなられた、やなせたかしさんも非常に、この松の木にご執心でというか、やなせさんだけは、この松を「ひよろ松」というふうに、あだ名を付けて呼んでおられまして、本当にかわいがってお



られてですね。

この松は震災後では生き残って、去年の5月ぐらいまでは生きていたんですけども、やはり根っこが塩に漬かっていたりとか、いろいろあって周りの環境もよくないので、去年の5月に生物学的には枯死したんですね。枯れた状態になりました。

それを聞いて、やなせさんもだいぶ悲しんで、「ひよろ松が死んだんじゃ、俺ももう駄目だな」みたいなことをおっしゃっていたんです。この間亡くなられました。やなせさんもいろいろ、この寄付をされたり、一本松の絵をいろいろ描いていただいたりとかしていただきました。

これは2年くらい前、ちょうど私が赴任したぐらいのときに、いまの陸前高田市の市役所、仮庁舎になりますけれども、自衛隊の撤収式をやったときの写真です。自衛隊にも、直後は本当に、道路を切り開く作業からお風呂の設置とか、いろんなことをやっていただいて、もう震災の年の8月ぐらいには撤収されましたので、いまは入っておられません。これが市役所の建物ということで、玄関の前に立っているのは市長の戸羽太ですね。

現在は市役所の前に、こういう垂れ幕なんかを設けまして、本当にいろいろなところにお世話になっているものですから、お礼の気持ちを伝えながら仕事をさせていただいているということでございます。

ということで、いまの市の現状の方を、さっとお話しさせていただきました。ここからちょっとパワーポイントの方に入りまして、財政のことについても少し触れたいなと思っております。

略歴は飛ばします。この辺も飛ばしますね。一応数字的なことを簡単に振り返ってみますと、被災前の人口が2万4千246、遺体発見数が1千554、行方不明数300弱ということで、1千800ぐらいの方がお亡くなりになっております。これは人口の8%ぐらいに当たります。非常に大きい数字です。

まだ行方不明状態の方がいらっしゃいまして、要するに、ご遺体が見つからない方が、いまだに200人以上はいらっしゃって、なかなか。死亡届とか葬式はできるんですけども、やられていない方も中にいるという状況です。

世帯数は9千弱ございましたけれども、そのうち全壊は3千159世帯ですね。そういう状態です。そのほかの建物関係も、いろいろと公共の建物、民間の建物含めて、かなり失っているということでございます。

仮設住宅にお住まいの方が多いということを先ほど申し上げたんですが、仮設住宅の基本的な問題点は、狭くて寒いということに尽きます。住んでおられる方にとっての問題点はですね。

よく言われるのが、やはり子どもに非常に負担が掛かっている。例えば、4人家族、お父さん、お母さん、子ども二人の家庭がよく住んでいる仮設のタイプは2Kという部屋です。仮設は、だいたい3種類、大きく分けて1K、2K、3Kとありますけれども、2Kという部屋に、だいたい住んでいます。

2Kというのは、リビングがありまして、寝室が別にあります。それとは別に、浴槽は付い

ていますけれども、お風呂、トイレ、キッチンは一応、二つコンロはあります、というのが一般的です。

だいたい仮設暮らしも、もう2年を超えていますから、皆さんの荷物もいろいろ増えられて、だいたい寝室というのは事実上物置になっているんですよね。そうすると、じゃあ、リビングでほとんど生活をします。食事時になればちゃぶ台を出して、みんなでご飯を食べます。それが終わったら、ちゃぶ台を片付けて、そこに布団を敷いて寝ます。

そういう状態で、よくあるパターンが、同じ部屋の後ろを振り返ると、遺影が飾ってある。だいたい家族の誰かを亡くしているという方が多いですから、もちろん仏壇を置く仏間というものはありませんので、そういうところに写真だけ簡単に飾っていたりとか、そういう生活です。

その状況の中で、例えば、もちろんお子さんの中には、受験の時期だったりとか、いろんな方がいらっしゃると思いますが、そういうときに遅くまで電気をつけて勉強できるスペースは、もちろんないわけですよね。そうすると家族の誰かが寝られないという問題が起こるということがあります。

いま言ったのは、住む方の問題ですが、仮設住宅がある場所というのが、だいたい小学校、中学校のグラウンドに建っています。なぜそうだったかと言うと、当時、本当に緊急的に2千200もの仮設住宅を建てる必要があったわけなんですけど、造成工事がいらない平らな場所というのが事実上ほとんどありませんでしたので、やむなく学校を使わせてもらったわけなんですけど。

そうすると、いま残っている問題というのは、当然グラウンドがありませんから、子どもたちの体育や部活動や、そういうことができない。現実的には、やるなというわけにも、もちろんいきませんので、といって仮設住宅はすぐに撤去できませんから、学校とちょっと離れた場所に、草むらとか、そういうところを見つけて、草取りをして、バックネットを張って使っております。ただ、もちろん従来のグラウンドより狭いとか、学校からだいぶ離れているということがありまして、だいぶ不便をしているという状況です。

ですから、そういうもろもろの問題があって、皆さんの最大公約数的な願いというのは本当に、「この仮設から、いつになったら出られる」、「どういう所で生活をリスタートできるんだ」ということが、最大の被災者の願いと言っていると思います。

ここに、簡単に年表的にまとめてみました。ちょっと感覚的なものなので、皆さんのように細かい事実というところを重視されると、ちょっとあれなのかもしれませんけれども。

2011年が震災が起こった年でしたけれども、その年に、これはだいたいほかのところでも同様かと思いますが、復興計画というプランニングですね。これは被災市町村でもつくるし、県でもつくるし、国でも、もちろんつくるものなんですけど、プランニングに着手しまして、2011年の12月、いまから2年前になりますか、議会の議決も経て、こういう計画ものが策定しました。

2012 年から、その計画に基づく事業、インプリメンテーション段階に入っていくんです。ただ 2012 年は、始まるというよりは、まだ詳細計画の段階ですね。マスタープランができたので、それに基づいて、例えば、高台移転すればいいけど、市内の何十カ所の、具体的にどこどこに移転するのかとか、手法はどうするのかとか、そういうふうな話し合いとか、地権者との話とか、そういうことをしておりました。

2013 年、本年になりましてから、先ほど写真でも見たような、ああいう工事ものが始まってきた。つまりは、予算とかの関係で予算を使って発注ができてきたということでございます。

それがしばらく今後も続くと思われました。例えば来年になりますと、一部の早い公営住宅とか、消防庁舎とか、あるいは高台の宅地も一部出来上がっていくということになります。

一応来年の 3 月が、がれき処理の最終目標処理完了年度と、震災年から 3 年度となっております。で、だいたいそこで終わるんですが、おそらくは一部はみ出す部分、つまり新年度の方に食い込む分があるだろうと当市では見込んでいますけれども、いずれがれきも、そろそろ終わりになるということでございます。

2015 年、2 年後になりますが、こういうふうになると高台移転とか公営住宅の完成が本格化しまして、被災した中学校の再建とか、新しい市街地ということで、先ほどののっぺらぼうになってしまった被災した所にも盛り土が終わって、その上に新しい市街地ができるところまで何とか行くのかなと。

その間も順次高台移転がどんどん進んでいって、いまから 5 年後になりますけれども、おそらく 2018 年ぐらいに全ての仮設住宅が解消できるというのは、2018 年に高台造成の最後が完成するぐらいなので、実際の仮設の解消となると、そこから、また 1 年 2 年かかるような気がします。そのようなスケジュールでございます。

ここはちょっと簡単にしますが、市民の犠牲も多かったんですが、市役所の犠牲も非常に多くて、いま 300 人職員がおりますけれども、68 名、つまり 4 分の 1 の職員を失いました。これは復興事業にとって大きな痛手です。というのは、仕事自体は震災前より何倍にも増えている。後で見せますが、予算は十何倍に増えているんですね。

予算が十何倍だから、仕事量は十何倍かと言うと、それはそうじゃない。数倍ぐらいかもしれませんが、いずれにしても増えている。それを 4 分の 3 の人員でこなさないといけないって、これはほとんど無理な話ですね。ですから現実には、全国の自治体間の連携というものをしております。ほかの自治体から被災地へ派遣応援職員を受け入れて仕事をしております。

関西からも結構というか、来ております。たぶん京都市役所の方も当市役所に、いま 2 名ぐらい来ておりますね。そのうちの 1 名が本学出身者ですけど、来ておりますね。

こういうかたちで、派遣職員の内訳として、岩手県をはじめ名古屋市とか、あとは一ノ関とかというのは岩手県内の隣町ですね。それから福岡 5 とか、京都市さんは 3、ほかは 1 名、2 名。関西だと奈良市、和歌山市、松坂は関西ですか。ちょっと分かりませんが、三重県ですね。といった感じで来ております。



さて、ここから財政の話をして私の話は終わりにしたいと思います。まず陸前高田市の一般会計、特別会計も幾つかありますが、そこは無視するとして、一般会計というのがございます。こちらの予算の推移を見えますと一目瞭然で、震災後に予算が膨れ上がっている。

簡単に言って、震災前は年間100億円規模の自治体でございました。それが今年度は1千330億円。いま、また12月議会が始まって補正案を出しておりますけれども、それにまた200億円以上のがれきの処理費が積み上がっておりますので、そういう意味では今年度1千500億円を超えるのは確実ですね。というかたちで、本当に15倍ぐらいに膨れ上がっているのが実態でございます。

では、その増えた予算、例えば、今年度の補正の前ですけれども、当初予算1千300億円の内訳として大きいものは何だろうということを簡単に抜き出してみました。一番多いのは、予算品目で言うところの土木費。これは536億円、40%になります。こちらが防災集団移転事業、土地地区画整理事業という、先ほど写真に見せたようなものになりますけれども、これが多くなっております。

第2位として総務費の331億円で、復興交付金積立という、ちょっと一見よく分からない費用。

土木費、特に防災集団移転と土地地区画整理事業というのは、高台移転の主な2事業、二本立ての事業と言われておりまして、面的整備事業と言われていそうですね。面的整備事業の15%ぐらいの費用は、効果促進事業という、これも専門用語ですけれども、比較的自由にソフト事業とかに使える復興交付金の仕組みとして自動的に交付されることになっているんです。

なので、勝手に来ます。勝手に来ますけれども、使い道がかなり限定されているので、来ても使い切れないことが確実な感じもあるんですけれども、それが積み立てられる分になるんですね。その分などを含んで331億円という感じになる。必要が生じたときに、そこから使うという感じですね。

第3位として、衛生費。衛生費と言うと、よく分からない。がれきと考えていただければ結構かなと思います。

という感じで、もうほぼ全てを占めておりまして、その他232億円を含めまして1千330億円ということでございます。

今年度はこうなのですが、昨年度、震災直後の2011年度とかは、がれきの比率の方がもっと高かったですね。土木がこうやって、がっと出てきたのは、たぶん今年度ぐらいからで、また今後数年は、そういうトレンドが続くのかなと思います。土木費も536億円では済まないのです、おそらく全体で2千億円ぐらいは行くと思いますね。累計でですね。

では、その1千330億円、今年度の当初予算の財源内訳はどうなっているのかということでございます。簡単に言ってしまうと、ほとんど国費に頼っているということになるんですが、第1位で国庫支出金ということで、591億円になっております。これは、いろいろもっと細かく分解していけば、いろいろ出てくるんですが、主に復興交付金等ということになりますね。

第2位が繰入金ということで、これは何かと言うと、前年度の繰り越しですね。前年度、予

算は積まれたけれども執行されず、要するに、事業がまだ開始できずに積んである部分がある。それを繰り入れて今年度に使っているということで、こういうものが入ってきております。

第3位として地方交付税。これは、いわゆる特別交付税を含みますけれども、これぐらいになっております。

そのほか、市税ということで、市税は11億円で、たったの1%を構成するにすぎない。市税収入も、だいたい半分ぐらいに減ってしまったんですが、震災前は17億円とか18億円ぐらいありました。

震災前であっても、全体の歳入に占める市税の割合は、それこそ17%とか15%とか、2割自治とか3割自治という言葉がありますが、本当に当市は2割自治ぐらいな感じであったと。ところが震災後、当然国費が膨らんで、逆に市税が落ち込んでいるということがありますので、いまは1%自治だということになっておりますが、これが実態でございます。

さらに、復興交付金がやはり大きいので、復興交付金の内訳を見てみましょうというふうに、ちょっと複数年度にわたっておりますけれども、分解したのがこちらでございます。

通しては、2011年、2012年、2013年、2014年の4カ年度で、計816億円の交付を受けております。そのうち、市の事業が588億円。県の事業の陸前高田市分が228億円ということでございます。

省庁で分けておりますが、そのうち、やはり大きな国交省が732億円。防災集団移転や土木の関係は全部国交省ですので、それが多いということでございます。あとは農水省等々ということでございます。

ちなみに、大きな「がれき」は、どこに行ったんだということで、がれきは復興交付金ではなくて災害復旧費ですので、これは後で見ますが、復旧費用というのは復興交付金から除かれていますので、復興交付金にはカウントされません。ですから環境省が1億円となっているということです。

復興交付金の課題ということで申し上げます。まずこれは、復興交付金の資料も付けておりますけれども、40というメニューがありまして、その40以外には使えないという用途の制約がございます。

そのうち、やはり40のメニューを見ていただいたら分かるんですが、一番大きいのは、国交省が23メニューを持っておりまして、土木のが多いんですけども、そういうふうになっております。やはり国交省関係は強いんですけども、そのほかの部分は弱いというふうになります。

2点目が復旧事業対象外。例えば、がれき費用も復旧費用の方に含まれますので、交付金には含まれません。その点はどうでもいいと言えばどうでもいいんですが、実はよく現場で問題になるのが、新しい箱物の再建をするときに復旧費用だけでは賄えないことが結構多いんです。

例えば体育館とか学校とか、図書館とかスポーツ施設、あるいは消防署とかをつくるときに、復旧というんだから、つくり直すのは全部出るんだろうと単純にお考えになるかもしれませんが

が、ちょっと違ってまして、復旧の定義は非常に厳密です。まず当然、従来規模、面積とかより大きくなるのは許されない。

さらに、ちょっと文科省の関係者が、この中にいたら申し訳ないんですけども、文科省関係が非常に問題がありまして、文科省の設定している復旧費用の建築単価が異常に安い。坪単価15万円とかなので、いま普通に誰に設計してもらっても、その費用ではできないんです。だから、同じ大きさのものを仮につくったとしても、その半額ぐらいしか出ないわけですね。

では、そのはみ出してしまう分はどうするかということになって、単純に、そのはみ出した分に復興交付金を使えばいいじゃないかと一般の方は考える。われわれも、もちろん当初はそう考えるんですが、それはできないんですよ。なので、そういうところをどうするかが結構現場では問題になります。

これは相談してもなかなか、あまりいい知恵も、もちろん復興庁とかに相談しても、ルールは教えてもらえるんですけども、じゃあ、どうしたらいいんだというのは、なかなか教えてもらえませんでした困っていますということになります。

それから、先ほどの自動的に一部配分される効果促進事業というのがあって、これは40のメニューに関係するようなハード、ソフト事業であれば使えるという立て付けになっているんですけど、これも結構制約がありまして。例えば、調査もの、何かマーケティング調査とか、人口動態調査とか、調査をするのであれば、ほほいくらでも無尽蔵に使えるんですけども、ただ、もちろん箱物整理とか、そういうものは、ほとんどできないことになっていますし。

自由度の高い資金ということになっているんですけども、実情、われわれのようなところでは使い切れないというか、積み上がってくるんだけど、タンス預金みたいなもので、使えないまま、そのまま積んであるという感じでございますね。

まとめでございます。いま見てお分かりになりますように、復興費用の95%は国費ですので、これが頼みの綱になっております。ただし、国の方は、その費用、お金を措置するのが仕事であって、実行主体は被災市町村でありますから、国、県の支援を受けて発注したりプランニングをしたり、何やかんやというのは全て自治体やっていて、人的にも被災したところが多いので、苦勞しているのが実態ということですね。

3点目として、面的整備事業、防災集団移転促進事業を「防集」というふうに、われわれは略していますが、防集、区画整備事業については手厚い予算措置がありますが、4点目として、それ以外のものについて、例えば復興交付金も、厚労省とか文科省関係は非常に弱いということがあります。

トータルでは、私も国の役人として、この復興交付金制度というものを見ていったときに、従来のものに比べれば当然よくはなっている。当然改善もされている。ただ、それでも、やはり被災地の現場からすると問題もあるし、まだまだ改善の余地があるのが復興交付金というものではないかと思っております。

それから、復旧と復興の間で財源措置に悩む場面が多いということ。これはなかなか伝わっ

ていけない部分でございます。だから、私の後の登壇者の方で、いわゆる被災地以外での流用の問題なんかをお話になるのかもしれませんが、われわれの被災地のところでは本当に、流用どころか、いま必要があるんだけど、それを使えないということがあって、結構自治体職員なんかは、真面目な職員が非常に多いので、それで頭を悩ませていることが多いです。

あとはちょっとおまけで、当陸前高田市では一応情報発信に力を入れているつもりでございまして、フェイスブックなんかも陸前高田市の公式フェイスブックページ「がんばっぺし陸前高田」というのをつくってですね、この左に写っているのが市長です。市長とか自分も毎朝、時には私的な話題に及ぶこともありますけれども、いろいろと市の状況とかを発信していると。

そして、フェイスブックで通販ページをやっています、そこでワカメとか、ホタテとか、そういうものが買えるようになっておりますので、もし、これを機に興味を持たれた方がおられましたら、ご協力いただければと思います。

最後の最後です。ちょっとマンパワーの問題、今日は多くは語りませんでしたけれども、実は来年、再来年ぐらいが必要とする人員のピークになっていきますので、その確保が非常に問題となっております。

予算については、やはり自由度が必要ということでございます。

震災から、もう、間もなく来年で3年目となりますけれども、やはり非常に、世間で被災のことが忘れ去られているという状態になってきていまして、いま訪問してくださる方も本当に減っているような感じなので、はっきり言ってボランティアをしてもらうとかではなくて、単に視察をするとか、単に様子を見に来るというのでも歓迎しますので、ぜひ来て現状をご理解いただければと思っています。いわゆる誘致策というか、そういうものも行政の施策の一つで、いまいろいろと検討しているところでございます。

いろいろ話したわりに内容があったか分かりませんが、お話を聞いていただきまして、どうもありがとうございます。以上で終わりにしたいと思います。